

子供の心身症に対する動物介在活動 ～活動に参加する犬の選定と育成～

長野県動物愛護センター

松澤淑美 丑山隆雄 小山淳一 金井真佐三 小林正美
小野祥平 藤澤英一 小林雅巳 藤森令司 川村昭道

1、はじめに

当施設では、不登校児童生徒を対象とした取り組みを実施している。

今回、これらの子供達を対象とした動物介在活動に参加する犬の選定と育成・トレーニング方法について検討したところ、若干の知見を得たので報告する。

2、実施方法

(1) 平成12年4月から平成17年3月の間に、犬10頭を選定し動物介在活動に参加させた。

(2) ふれあい活動適性診断は、(社)日本動物病院福祉協会CAPP認定基準()に、当施設での診断基準()を加えた項目で実施した。

正しい健康管理が行われている。

見知らぬ人に出会ったときでも落ち着いていられる。

他の動物に対して落ち着いて接することができる。

人混みの中でも落ち着いて歩くことができる。

オスワリ、フセ、マテ、オイデができる。

訪問活動参加中に情緒不安定にならない。

移動中のキャリーバッグや車中에서도鳴いたり騒いだりしない。

みだりに排泄をしない。

子供の大きな声に対して過剰に反応しない。

子供の急激な動作に対して過剰に反応しない。

子供に触られたとき落ち着いて静かにしていることができる。

初対面の子供に対して、拒むことなく注目できる。

子供と楽しそうに遊ぶことができる。

犬自身が進んで対象者の合図に確実に従う、又は合図が不明瞭であっても積極的に注目する。

(3) 育成は、不妊措置・健康管理・充分な社会化(人、犬、他の動物、生活音等への馴化)と同時に基礎的なトレーニングを実施した。トレーニング方法は、犬に対する嫌悪刺激を用いず、犬の正しい行動を強化する方法で実施した。さらに、犬自身が子供に対してうれしいと認識できるよう、日常生活の中で子供との遊びやゲームを取り入れた陽性条件付けをするトレーニングを実施した。

3 結 果

(1) 保健所の子犬1238頭を対象に、健康診断と性格診断を実施し1150頭を当施設に引継いだ。

(2) 日常の行動観察から30頭を候補として選び、ふれあい活動適性診断を実施し、これに合格した16頭を育成対象とした。

(3) 育成中に、犬のストレスサインと考えられる行動が見られた場合は、その都度診断を行い再検討しながら、最終的に16頭中10頭を不登校児童生徒を対象とした動物介在活動に参加させることができた。

(4) 対象の子供達がふれあいを希望した犬には、最初に会った時、対象者を拒まずうれしそうに注目する 当施設スタッフが同伴することにより、安心して楽しそうに対象者と遊ぶ 継続した活動の場合は、犬自身が対象者を記憶し毎回反応する 犬自身が進んで対象者の合図に確実に従う、又は合図が不明瞭であっても積極的に注目する、といった特徴があった。

(5) ふれあい活動適性診断に合格し、子供達に対する陽性条件付けを行った犬は、(4)の特徴を有し、不登校児童生徒を対象とした動物介在活動に向いていた。

(6) 対象者個人の状態に応じて、犬のトレーニングメニューを作り、よりきめ細かな対応をすることによって、この活動は更に深まった。

(7) 今回対象となった不登校児童生徒は、小学生から高校生まで57名であり、その活動結果は、次のとおりであった。

強迫的な行動や身体的な症状の消失、発語、ボランティア活動への参加、再登校などの新たな転機があった：29.8%

新しい活動項目に積極的に取り組み、当施設スタッフとの関わりに積極的であった：36.8%

同じ活動を継続して希望し、現状が維持されていた：22.8%

活動の継続を希望しなかった：10.5%

4 考察

当施設では、不特定多数の子供達とのふれあい活動を目的とした適性診断基準を設けて犬を選定し、育成とトレーニングを日常的に実施している。今回の結果から、この診断基準と育成方法は、不登校児童生徒を対象とした活動にも適していると考えられた。

対象者の89.5%は活動の継続を希望し、そのうち66.6%は発展的な変化が見られた。対象者の殆どが自宅で何らかの動物を飼育している所謂「動物好き」な子供であり、この活動は、対象となる子供達が動物に対して好意的な感情を持っていることが前提と考えられた。活動の継続を希望しなかった6名の理由としては、本人の意志ではなかった、遠隔地のため通えないなどであった。

この活動を継続する中で、負傷動物として保護された犬やふれあい活動に適性のない臆病な犬が、対象者の心の支えになることもあり、動物介在活動の多面性を認める場面もあった。

動物介在活動の導入時には、犬以外の動物の果たす役割も多いことが認められたので、今後その選定と育成方法についても検討したい。

<参考文献>

- 1) 藤沢英一，譲渡を目的とした子犬の選定について，平成15年度全国動物管理関係事業所協議会調査研究発表，2003
- 2) 犬竹順子，動物愛護センターにおける社会化期の子イヌの行動と譲渡後における問題行動の発現との関連性，日本家畜管理学会・応用動物行動学会誌 Vol.41 No.1 2005